

トニオへ捧げる請求書



著 * Nana Tsu



1. お茶しませんか？

「いらっしゃい」

エリアス都市の交易商人が言った。男性の冒険者が、その声で振り返る。交易商人は、その冒険者を見て目を細めた。

「ほほう、ギルドに加入していない冒険者さんとは、珍しい。しかも『トニオの弟子』というタイトルをお持ちですね。なんだか、私と縁がある方ようだ」

交易商人のトニオは、そのタイトルを興味深そうに眺めた。そして、何か思いついたように笑うと、

「あなたに特別なお話があります。どうでしょう、お茶でもしませんか？」

そう、男性の冒険者に切り出した。

◇◇◇ トニオへ捧げる請求書 ◇◇◇

男性の冒険者の名は、ルイン。なぜかトニオに声をかけられ、お茶に誘われてしまった冒険者である。ルイン自身、なぜ誘われたのか、まだ理解できていない。

トニオは、アトランティスから来た交易商人で、エリアス都市で食料や天然資源などの仕入れをしている。しかしトニオの商売の手腕は、仕入れだけにとどまらない。潜水艇の乗客管理など、様々な事業を手掛けており、特に、アトランティスの高い技術力で、冒険者の装備についた効果を変化させるオプションリフレッシュという商売は有名である。

そんな有名商人が、ただの冒険者に何の用があるというのか。

お茶と言う名目で連れて来られたレストランには、女性の冒険者が居た。どうやら、彼女もトニオに呼ばれたらしい。先着していた彼女は、紅茶を頼んでいたようで、トニオとルインが席に着くのと、テーブルに紅茶が運ばれたのは同時だった。

「さて」

と、トニオが手を組んで話を始める。彼女が、紅茶に蜂蜜を注いだ。天空豆の樹塔で採れたと言う蜂蜜からは、良い香りがした。

「私、交易商売の拠点として『株式会社トニオ』というギルドを設立しようと思っています。こ

のギルドが設立されれば、旅の三兄弟の商売とは異なった新たな販売ルートを形成することができ、大陸の発展が促されることは間違いありません。ですが、このギルドを運営するためには、一つの問題があります。それは、人材です」

そこで、トニオは言葉を区切ると、ルインと女性の冒険者を見た。

「現在、ギルド加入希望者を募っています。つまり、あなた方に、私のギルドに加入していただきたいのです」

ルインは、ちらりと女性の冒険者を見た。彼女もギルドに加入していないらしい。なるほど、そういう訳か。それにしても、マスターがトニオというギルドなんて、人が集まる気がしない。

そうは思いながらも、ルインは一応、質問してみる。

「ちなみに、ギルドの種類は？」

「中立です。アトランティスの技術は中立ですから」

ギルドには三つの種類がある。秩序を重んじるギルド、力を重んじるギルド、そして、そのどちらでもない中立のギルド。

一説では、中立のギルドは、力や秩序より金銭を重んじるとも言われている。なるほど、交易商人のトニオらしい選択だ。中立ならば悪い話じゃない気もする。

「私は、加入しても良いですよ」

紅茶を飲み終わった女性の冒険者が発言する。あまりにも、あっさりとした決定だ。まあ、ギルドなんて加入も脱退も簡単なものなのだから、そこまで思案する必要もないのかもしれない。

彼女は、返答も終え、紅茶を飲み終わってしまって暇になったのか、回復の演奏らしき旋律を口ずさみ始めた。どうやら彼女は、癒し系の魔法を得意とするアーティストの様だ。

その旋律を聞きながら、ルインが質問を重ねる。

「設立はいつですか？」

「私の誕生日と同じ日を目指しています」

少し照れがあるのか、トニオは苦笑した。

「と、言うത്？」

「十月二十日です」

ルインの頭の中でカレンダーがぱぱぱっとめくれる。

「って。今日じゃないですか！」

「ええ。ですから、急いでいるんですよ？」

トニオは圧力をかけるように、一言そう言った。更に畳みかけるように続ける。

「お金の心配はありません。従業員との交流イベント費用として、プラントの肥料も私が持ちましょう」

ギルドには端々でお金がかかると聞いている。特に、ギルド特有のイベントで、プラントと呼ばれる樹木を育てた後に行われる収穫祭というのは、開催するために多額のお金がかかる一方、貴重な素材がたんまり手に入るという噂である。

この言葉にルインの心は揺らいだ。武器に防具にと何かとお金のかかる昨今。それは好機に感じた。ギルド加入は突如降ってわいた話だが、もしかしたら、これは最大の幸運かもしれない。

「それにしても、そんな経営で、赤字にならないんですか？」

ルインが、念のための確認という感じで尋ねる。すると、トニオが微笑んだ。

「問題ありません。私にはリフレでの収入がありますから」

リフレと言うのは、トニオの商売であるオプションリフレッシュの略称である。ルインは、そのトニオ微笑みに一瞬殺意が湧いた。そうだった。リフレという商売に、赤字というものはない。ルインも、何度となくリフレに多額の金をつぎ込んでいるのだ。

女性の冒険者は、少し興味を引かれたようで、のんびりした声で尋ねる。どうやら、まだそんなにリフレの利用をしたことがないようである。

「そんなに儲かるんですか？」

その問いに、トニオは笑顔で、指を九つ立てて見せた。

「ええ。先ほども、これほど、お代をいただきました」

「え、九十万？」

女性が驚きの声を上げる。その驚きを、トニオは柔らかく否定する。

「いいえ。九百万です」

その金額を、一人の客からもらうのだ。トニオの指にそれぞれはまった指輪が、それを物語っている。どの指輪の石も高価そうだ。トニオの総財産は途方もないに違いない。

そこまで考えると、ルインは腹を決めて返答した。

「いいでしょう。私も加入します」

ルインの腹を決めさせたのは、ギルドで得られる利益ではない。それも、一つの要素ではあるが、ルインが最も興味を惹かれた対象は、トニオの抱える総財産の方である。

2. 個性的で話題性がある豪華

あの指輪をオークションで売ったら、いくらになるだろうか。トニオの指輪を眺めながらルインは思惑を巡らせた。トニオの財産には興味があった。総取りというのは難しいかもしれないが、ギルドのマスターとメンバーという縁がある以上、じわりじわりと資金を頂戴していくのも手である。

ギルド加入は建前。あわよくば、彼の財産をいただいてしまおうと考えている。この衝動ばかりは抑えられない。なにせ自分は、財宝には目がない職業なのだ。

「ルーインウォーカーのルインさん、でしたよね？」

名を呼ばれ、ルインはトニオの方を振り向いた。

「え、ああ。ギルド加入の手続きでしたっけ」

思考に気を取られ、すっかり忘れていた。ルインは、職業と名前の確認をしていたトニオに返答する。

「ええ。ルーインウォーカーです。名前はルイン。間違いはありません」

トニオはルインをギルドに加入し終わると、女性の冒険者の方を見る

「あなたは、アーティストの……」

「アーティです。よろしくお願いします」

女性冒険者はそう言って、ぴょこんと頭を下げる。ルインは、つられて軽く頭を下げた。

トニオは、ルインとアーティのメンバー登録を済ませると一息ついた。

「一気に二人も入っていただいて。常連の冒険者に、ギルドメンバーの募集のやり方について聞いたかがあります。さすが常連の方のアドバイスは成功に繋がりますね」

トニオのその言葉に、ルインは違和感を覚える。なぜなら、トニオのギルド勧誘は、異質な形だったのだ。歩いている際に、突然「お茶でもしませんか」と言われたことに始まり、あれよあれよという間に、レストランに座らされ、ギルドの話や延々聞かされたのだ。

「その常連さん、なんて言ったんです？」

アーティも同様のことを思った様だ。間違っても、常連の冒険者がそんなギルド勧誘を教えるはずが無い。トニオは、当時の会話を思い出すように、二人に告げる。

「ええ。『ギルドメンバー募集って、どうやるんでしょうか』と尋ねましたら、『リングを付けて、茶室で募集したらいい』と。それで、こうやって指輪をたくさんつけて、お茶にお誘いした次第です」

トニオはそう言って、自身の指にはめた沢山の指輪を見せる。なんだって。そんな馬鹿な、とルインとアーティが思ったかはともかく。二人とも、言葉がでない代わりに、ひとつ大きなため息をついた。

二人とも、間違いを指摘する気は起きなかった。

トニオは、そんな二人の反応を見て、軽く首をかしげながら、手帳を開く。

「ギルドルームについて、一つ、提案があります。交易商売をする以上、普通のギルドルームでは話題性がないと思います。もっと個性的で話題性のある豪華なギルドルームを用意したいので

すが」

そう言って、トニオは手帳の間から、一枚の地図を取り出した。

ギルドを設立すると、ギルドルームが与えられる。その部屋の内装は、ギルドの種類によって異なる。中立の場合は、木々や自然の多い部屋のはずだ。それを無個性とは思わないが、確かに商売をする以上、個性的であれば宣伝になるのかもしれない。もっとも豪華というのは、トニオの趣味のような気もするが。

そう思って、ルインは地図を覗きこんで、沈黙した。地図はエリアス周辺のもので、数か所チェックが入っており、その中の一か所に、赤いペンで丸が記してある。その赤い印の場所が問題だ。

トニオが地図上の赤い印を指差して、解説する。

「エリアス都市から近くて、相応しい物件をピックアップしました。その中で、一番適していると思われるのが、この赤の場所です」

「ポウ邸・・・・・・・・ですね。そういえば私、家の前までしか行ったことないな」

アーティが呟いた。ポウ邸というのは、エリアス王宮前の道の奥にある屋敷のことだ。そのポウ邸の最深部の部屋『ゴシックルーム』に赤い丸の印が付いていた。しかも、『ゴシック』の文字に×が付けられ、その下に『ギルド』と書き添えられている。

確かに、ここはエリアス都市から近い個性的な物件には違いない。ただ、個性とは言っても、それが良い個性かは別問題だ。ポウ邸には、お化け屋敷という噂もある。そもそも、ギルドルームの管理をしているナンはともかく、ギルドルーム内でアイテムの売買などを行っているシュブールさんは出張扱いになるのだろうか。

「ポウ邸って、人の家じゃないんですか？」

アーティが、ふと気付いたという感じで、重要な問題点に言及する。誰も住んでいないとされている屋敷だが、窓辺には人の姿が見えると言う証言もあるのだ。この問いに、トニオは笑顔で、

「もし人のならば、買い取ればいいのです」

言いきった。

3. PT募集（ポウ邸に同行してくれる方）

とりあえず、人の家かどうか調べるのが先決だと言う結論になった。エリアス王宮に確認を取ることであり、国王に謁見するに至る。

中央集権となっているエリアス国王ラジャータは、現在、四十八歳。まだ若き国王の傍には、シルヴァ姫が居た。亡き妃の忘れ形見であるシルヴァ姫は、まだ幼いものの、すでに次期王女の品格を備えていた。端的に言えば、年齢の割に少し生意気なお姫様、と言ったところだ。

二人を前にして、ポウ邸の話を持ち出せば、国王より、姫の方が反応を示した。

「あのお屋敷には、お化けが居るのじゃ！」

シルヴァ姫がそう言えば、ラジャータ国王が穏やかな声で説明を加える。

「さだかではない。ただ、あの屋敷では、人がいないはずなのに悲鳴が聞こえたり、窓から白い髪が見えたりすると言う話もあるだけだ」

どうやらラジャータ国王は、シルヴァ姫の主張するお化けの存在は、あまり信じていないようだ。ポウ邸に、遊び半分で忍び込んだ者の仕業程度と考えているのかもしれない。シルヴァ姫の主張も、お化けが怖い年頃ゆえだと解釈しているのだろう。

「そのお化けが退治できましたら、あのお屋敷、いただけますか？」

トニオが臆することなく問う。これには、ラジャータ国王は短く答えた。

「好きにしてよい」

「おぬしら、お化けが怖くないのか？」

シルヴァ姫が戸惑いながら問う。トニオが口を開いた。

「大丈夫です。シルヴァ姫様。お化けと言われる物には、大抵正体があるものです。アトランティスへ向かうために潜水艇を遠目で見た人が、海に巨大な怪物が居ると思ったりしますが、それと同じです。実際に近くで見れば、もう潜水艇にしか見えません。アトランティスの技術の前に、お化けなんて存在しませんよ」

さすがトニオ。超文明のアトランティスから来ただけあると言うか、怖いもの知らずと言うか。

しかし、そのトニオの論理武装もシルヴァ姫には通じない。

「あのお屋敷には居るのじゃ」

シルヴァ姫は、小さいながらも強い口調で言う。

「お化け、怖いですか？」

トニオの後ろから、アーティが問えば、シルヴァ姫は息を詰ませた。そして、どこからか、幽霊をモチーフにしたらしい鎌を持った人形を持ってきて、床にたたきつける。

「お、お化けなんて、こうしてくれる！」

どうやら怖がっていないことをアピールしたいらしいのだが、逆効果だ。これで怖がっていることが判明したも同然だ。ルインは、つい意地悪心で言う。

「六歳にもなって、お化けが怖いんですね」

「童は今年で七歳じゃ！」

嘲笑されたと思ったのか、お化けを怖がる自分を恥じたのか、シルヴァ姫は少し赤面しながら、大きな声で訂正した。と、そこでトニオが良案を思いついたように手を打った。

「せっかくですから、このトニオ、ポウ邸へシルヴァ姫様をお連れしましょう。その目でお化けが居ないことを確認したら良いのです」

どうせお化け退治と、ギルドルーム確保のためにポウ邸へ向かうのだ。同行者が一人増えても問題ないと考えたらしい。この降ってわいた提案に、ラジャータ国王は、

「ふむ、良い案だな」

好感を示した。どうやら、この国王、シルヴァ姫のお化け嫌いには多少迷惑していたようだ。この父上の反応に、シルヴァ姫は小さく悲鳴をあげる。姫とて、国王には逆らえないのだ。

「父上、まさか。嫌じゃ！」

シルヴァ姫の悲痛な懇願は、ラジャータ国王の耳には届かなかった。

かくして、トニオに、シルヴァ姫をポウ邸へ連れて行くと言う任務が与えられた。お化けが居ないことを確認させ、無事、エリアス王宮まで連れ帰ってくる、という任務である。任務と書いてクエストとも読む。実質、『株式会社トニオ』の初仕事である。

こうして、トニオ、アーティ、ルイン、そしてシルヴァ姫という四人パーティーが完成した。

4. カボチャの頭

闇の森を通り抜けた所に、ポウ邸があった。周りを、日中でも陽の光を見ることが出来ない闇の森に囲まれているせいか、夜の不気味さをまとった大きな屋敷である。その屋敷の入り口の前には、顔の形に中をくり抜かれた大量のカボチャが並んでいた。

「ジャックランタン、みたいだな」

ルインが言う。ジャックランタンとは、ハロウィンのカボチャの飾りのことだ。顔の形に中をくり抜いたカボチャの中に、ロウソクを立てて飾るのだ。

「そういえば、十月三十一日ってハロウィンですよ。近いから準備ですかね」

アーティがジャックランタンを突っついて言う。自由な二人をよそに、シルヴァ姫はトニオの後ろからジャックランタンを覗いた。

「童には、赤いさとうきび畑に居るパンプキンに見えるぞ」

エリアス都市の少し先にある赤いさとうきび畑には、パンプキンというモンスターが居る。たしかにそのモンスターの頭部に見えなくもない。

シルヴァ姫の発言に、アーティは突っついていた手をひっこめた。

「え・・・・・・・・まさか。死んでる？」

「ただのカボチャです。気にしすぎですよ」

トニオはカボチャを覗きこんで断言する。そして、入り口で問答している暇はない、と屋敷の中へ向かってしまう。カボチャを不気味に感じながらも、それに皆が続いた。どちらにせよ、一度そうかもしれないと思ってしまうと、もう迂闊に触れられないのだ。

5. 悲鳴の主は誰？

屋敷の中は薄暗く、見通しが悪い。所々にはクモの巣が張っていた。

「見よ！　なんか今、あのクモの巣が動いた気がするのじゃ」

シルヴァ姫が部屋の隅に作られた大きなクモの巣を指差した。これにはルインが、ため息をついた。闇の森を通る時にも、この種のクモには出会っているのだ。

「この森にはアラクネという見えないクモが居るって、先、お話したでしょう。きっとそれです」

アラクネは主に闇の森に生息するクモだが、屋敷の中にも数匹紛れ込んでいるのだろう。何の不思議もない。

「カーテンが動いたのじゃ！」

「風です」

ルインが即答する。あまりにシルヴァ姫が、あちこち指摘するので、歩みは遅々として進まない。そうこうしている内に、後ろから別の冒険者が来て、自分たちを抜かして行ってしまった。

「あ、あれはなんじゃ！　何か大きな傷があるぞ」

今度は、シルヴァ姫は通路の壁を指差した。壁面を一刀両断するように、縦に大きな傷が入っていた。確かに不気味な傷ではある。

「なんか、これ、ノコギリの傷に見えませんか？」

アーティが恐る恐る呟いた。先ほどのジャックランタンの件で、シルヴァ姫の怖がりに触発されているらしい。そう言えば、アーティは、ポウ邸の中に入るのは初めてと書いていたのだろうか。

と、その時、遠くの方でギャーという悲鳴が上がった。

アーティとシルヴァ姫が、思わず身をすくめる。遠いものの、それは明らかに悲鳴に聞こえた。先ほど通り過ぎた人の悲鳴だろうかという考えがよぎる。

「は、離れるでないぞ」

シルヴァ姫は、手近なルインにしがみ付くと、命令した。そんな命令されなくても、強くしがみ付かれて、こらちとしては離れたくても離れられない。動きにくくて不便である。トニオの歩みが速いので、シルヴァ姫を半ば引きずる形で歩く格好だ。たぶんトニオが早いのではなくて、シルヴァ姫が極端に遅い。

「そういえば。このあたりに、ホワイトチャペルのジェイリーの姉妹が居た気がする」

シルヴァ姫を引きずりながら、ルインが言った。

「ホワイト……ってどんな所です？」

話をすることで怖さを軽減しようと思ったのか、アーティが尋ねる。このアーティの期待には、残念ながら答えられないが、ルインは正直に返答した。

「陰気で、殺人事件とか起きそうな街かな。というか、多分起きてる」

アーティが聞かなきゃ良かったという顔をした。

「・・・・・・・・その、ジェイリーとはどんな奴なのじゃ？」

シルヴァ姫が尋ねる。怖ければ聞かなきゃいいと思うが、怖いもの見たさみたいな部分があるのだろう。これにもルインは正直に答えた。

「チェーンソーを持ってて、十三日の金曜日あたりに出てきそうな感じです」

「きょ、今日は、二十日だから大丈夫ですよ！」

アーティが、これ以上聞きたくないとばかりに否定した。

その時。闇に、チェーンという金属音が響いた。音は、アーティの後方から聞こえた。

「え？」

アーティが振り返る。その瞬間、チェーンソーが闇から姿を現した。

近い。ルインはシルヴァ姫を引きはがすと、片手でアーティの襟首をつかみ自分より後ろへ退かせた。降り下ろされたチェーンソーが、間一髪で空を切る。

白い面を被った巨体の女性の人型モンスターである。彼女は、手ごたえが無いのを感じると、すぐさまチェーンソーを持ち直した。それと、ルインが短剣を素早く構え、投げたのは、ほぼ同時だった。チェーンソーが再び振り下ろされるのより早く、短剣がその身を貫く。

「ギャー」

という断末魔が響いた。先ほど聞こえた悲鳴と同じ声だった。どうやら先ほどの悲鳴の正体はモンスターだったようだ。

「ルイン先輩すごいですね」

後ろへ追いやられていたアーティが感嘆の声を上げる。

「いつから先輩になったし」

「間違っていないじゃないですか。だって、レベル的に先輩だし。一発で倒しちゃったし」

いつの間にか、アーティの中ではルインは先輩に昇格したらしい。ルインは呆れながら、放り出してしまったシルヴァ姫を拾う。突然のことに、シルヴァ姫は怖がっている暇もなかったようで、呆気にとられていた。ただ、一言。

「童を粗末に扱うでない」

文句を言った。恐怖より皮肉が先に出るのだから、こちらも問題ないようだ。

6. お化けを一匹飼いませんか

トニオにすっかり置いてかれてしまった三人だったか、とりあえず歩みを進めていた。

途中、白い髪の女の子の姿をした人型モンスターに、注射器で襲われたりしながらも、無事である。

「ルイン先輩、また、一発で倒しちゃいましたね」

アーティが楽しそうに言う。すでに、怖いという感情は失せている様で、襲われた瞬間に、「行け、ルイン先輩！」と叫ぶくらいの余裕はあるようだ。もっとも、その扱いには、釈然としないものがあるが。少なくとも先輩の扱いじゃないよな。

「あの注射器。思い出ただけで鳥肌が立つのじゃ」

シルヴァ姫がぼやく。お化けの次は、注射器も嫌いらしい。

「そんなんじゃ、予防注射で泣いちゃいますよ？」

アーティが、にこやかにシルヴァ姫に告げる。アーティに、痛いところをついかれたのか、シルヴァ姫は、予防注射と聞いただけで青ざめた。

「注射器は存在しているだけで駄目なのじゃ！」

二人の会話を無視して、一人思案していたルインが、ぽんと手を打った。

「あ。注射で思い出した。先の女の子、誰かに似てるな、とっていたんだけど。ナースだ。ナースホワイト」

ナースホワイトというのは、注射器を装備した看護師風の人型モンスターのことである。

「また、ホワイトですか？」

アーティが呆れたように言った。

「いや別に、ホワイトチャペルつながりじゃないから」

ルインは肩をすくめた。そうこうしながら歩いていると、通路の途中に上りのハシゴに当たる。三人がハシゴを上り切ると、出迎えるように、それは居た。

鎌を手にし、マントを身にまとったモンスターである。浮遊しており、その姿は青白い炎に照らされ、幽霊と言う形容が相応しい。そのモンスターの名は、スペクターと言う。

「お化けじゃ……！！」

シルヴァ姫の短い悲鳴。ルインは、短剣を構えるものの、思案して攻撃しない。

「シルヴァ姫の言うお化け代表は、スペクターか」

そう呟くと、ルインは短剣をしまった。そして、無粋な動作でスペクターに近寄ると、ジャンプしてスペクターを捕まえた。具体的には、マントの端を掴むと、引きずるようにして、スペクターをシルヴァ姫の前まで持ってきたのだ。

「な？」

シルヴァ姫が声にならない声を上げた。

「シルヴァ姫が持っていた幽霊をモチーフにした人形。スペクターの人形でしたよね？」

ルインが確認を取る。

「あ、そういえば。似てますね」

アーティが同意した。エリアス王宮で会った時、シルヴァ姫はスペクターの人形を持っていた。お化け嫌いを克服するためだろう。

「人形で慣れようとしてないで、一匹飼ったらどうです？」

仮にも王女様なんだから、それくらいできるだろうとルインが提案する。シルヴァ姫は首を横に振ると、その提案を丁重に断る。

「仕方ない。とりあえず慣れましょう。ほら、これはただのモンスターです。攻撃されたら痛いですが、幽霊とは違います」

そう言ってルインは、スペクターの頭を叩く。アーティもそれにつられて、スペクターの頭を後ろから叩く。スペクターが少し悲しそうに鎌を振るが、それは見なかったことにする。

「ほら。この青白い炎なんて、バナナの生産材料になるんですよ。バナナ好きですか？」

ルインは、スペクターの青白い炎を素手でつまむ。魂の花火と称されるこの炎には、熱はない。この魂の花火、錬金を扱う者が扱えば、バナナに作り替えることができるのだ。

「む、バナナは好きじゃ」

シルヴァ姫は、見知った黄色い皮の食べ物を思い浮かべた。なんとなく、親近感がわく。

ルインは、シルヴァ姫に青白い炎をぽんと投げた。シルヴァ姫はそれをとっさに受け取ってしまう。そして、恐々としながらも、それに熱が無いのを確かめ、青白い光を眺めた。

「まあ、これくらいなら大丈夫じゃ」

これが、お化け克服と言えるかは分からないが、とりあえず一歩前進には間違いない。ルインはそんなシルヴァ姫を見て、こんなもんか、と思うと、捕まえていたスペクターを手放した。ふいに自由になったスペクターは、小突かれた怨みを晴らすべく鎌を振り回したが、それは叶わないまま、あっけなく止めを刺された。

そして、スペクターに別れを告げて間もなく、三人は屋敷の最深部の扉にたどり着いた。

7. 豪華な部屋

屋敷の最深部。豪華な扉の前に、トニオは立っていた。

「皆さん、遅いですよ。いったい、どこではぐれたんですか？」

最初の段階ではぐれていたのだが、それには気付かなかったとみえる。

「結構、頑張ってきたんですけど～。トニオさんは、モンスターに会わなかったんですか？」

アーティが、襲われ疲れをアピールする。トニオは首をかしげた。

「モンスター？ 何か居ましたか？」

「え、居たでしょ」

ルインは思わず声をあげた。今まで一人で何体の敵を倒したことか。

チェーンソーを持った人型モンスターとか、注射器を持った人型モンスターとか、幽霊みたいなモンスターとか！

「まあ、お化けは居なかったようですから、多少のモンスターは問題ありません」

トニオはさらっと言う。『株式会社トニオ』に、平等な労働量という物はなさそうだ。そもそも、これに給料は出るのだろうか。ただ働きと考えると、回復用の薬だけで赤字だ。やはり、入るギルドを間違っただろうか。ルインに後悔の念がよぎる。

「この奥が目的地。私たちのギルドルームを予定している場所ですよ」

トニオは豪華な扉を指差した。

当初の目的が、ギルドルームの獲得だったことなんて、すっかり忘れていた。正直な話、最初からそんなものに興味はない。だが、その豪華な扉がルインの興味を惹いた。

豪華な扉の内側は、やはり豪華な装飾がされていた。『ゴシックルーム』と書かれたプレートの付いたその部屋には、クモの巣ひとつなかった。今まで通って来た場所とは、雰囲気からして違っていた。

天井からはシャンデリアが下がっており、壁際には剣が飾られている。床には赤い絨毯。

誰も居ないとされている屋敷なのに、テーブルの上には食事の準備があった。一人分の銀食器にカボチャのお粥が盛られており、スプーンが添えられていた。今すぐにでも、ここで食事を始められるような雰囲気である。

「これ、玄関にあったカボチャの中身ですかね」

アーティが呟いた。屋敷に入る時に見たジャックランタンを思い出す。顔の形に作られたカボチャは玄関に。くり抜かれた中身は、お粥に。ありそうな話だ。

問題は、誰がそれを食べるのか、という所だが。

「趣味の悪い抽象画じゃ」

シルヴァ姫が、中央の壁面にかかった大きな絵画を見て言った。紫の帽子を被った女性が、抽象的なタッチで描かれている。

「落書きしたくなる絵ですね」

アーティが素直な感想を述べる。不本意だが、同意できるとルインも思った。

「額縁に『レディ・ハグ』と書いてあります。古い時代の絵画のようですね。ここをギルドルームにする際には、取り外しましょう」

トニオが額縁に触れた。美術に造詣が深いらしい。次は古美術の事業に手を出す気だろうか。

「童の写真の方が、よっぽど可愛いぞ」

シルヴァ姫が、どこからか自身の写真を取り出して、アーティに見せる。

「こんな変な絵を中央に飾るとは、センスの無い部屋じゃ」

王宮で優雅に過ごしている者には、豪華には豪華なりのセンスがあるのか、シルヴァ姫はそう酷評した。アーティは、そんなもんなんですか、と相槌を打ちながら、陶器の壺を手にとって眺める。その時、どこからか、声が聞こえた。

「変な絵と仰いまして？」

静かな怒りに満ちた女性の声だ。そして、音をたてて、絵画が縦に裂ける。裂けた絵画の中から、毒のある美しさを持った女性が現れた。どうやら、この屋敷の主らしい。さすがのシルヴァ姫も、絵の中から登場するという趣向の良し悪しには追求せず、ただ黙って彼女を見ていた。

「人の屋敷に勝手に踏み込んで、無礼な虫ね。私をパンドラと知ってのことかしら？」

紫の帽子を被った女性は、パンドラと名乗ると、部屋に居る者を侮蔑の目で見降ろした。蛇の睨みのような冷やかな目に、場の空気が凍った。

その時、その雰囲気壊すかのように、がちゃん、と陶器の割れる音がした。絵画から現れた女性に驚いたのか、アーティが、陶器の壺から手を滑らせたのだ。床に接触した陶器の壺は、衝撃を吸収できず、そのまま見事に割れてしまった。

絨毯に壺の破片が散らばる。その壺の破片を一瞥して、パンドラの表情が変わった。

「おほほ、許さなくてよ」

怒りが頂点に達したのか、狂気の笑い声である。ルインは恐怖を感じた。下手なお化けより、こちらの方がよほど怖い。

「おほほほ、私の機嫌を損ねた代償。その命で償うがいいわ」

パンドラは、高笑いをする、手にした扇を振り下ろした。とたんに、シャンデリアが急速に落下し、テーブルが食事を乗せたまま飛んでくる。

ポルターガイストにも、もう少し加減があるだろうという乱舞である。

「端に行って、しゃがんで！」

ルインが叫んだ。トニオが、シャンデリアの下に居たシルヴァ姫を救い出し、部屋の端に身を寄せしゃがみこんだ。

「あ、童の写真が」

連れ出された勢いで、写真を手放したらしく、シルヴァ姫が小さな悲鳴をあげるが、その声は、シャンデリアの落ちる音にかき消される。傍で、アーティが回復の旋律らしき演奏を始めた。

ヒステリーな笑い声と共に、今度は飾ってあった剣が、刃先を向けて飛んでくる。

「おほほほほ、覚悟はできていて？ 虫は駆除してさしあげる」

剣の一部は花瓶や絵画を破壊し、壁に突き刺さった。

ルインが、短剣を構えると、パンドラに向けて素早く投げる。それを見て、パンドラが扇を開いて、一振りする。

「邪魔だわ」

とたんに、短剣が上に弾かれ回転しながら落下する。ルインはそれ受け取ると、その流れのまま一突き。これはパンドラをかすめた。どちらかと言えば、ルインの優勢。確実にパンドラの体力は、削れていた。

アーティの演奏の種類が変わるのが聞こえる。ルインは、最後のけりをつけようと、複数の短剣を構えた。それを見て、パンドラは悔しそうに唇を噛む。

「くっこうなったら」

パンドラは、一つの袋をルインに投げてよこした。紐が緩んでいた袋からは、魂の器が現れる。

「これを持って立ち去りなさい」

パンドラが告げた。魂の器は、レアな素材の一つで、オークションでは高値で取引される。分かりやすい買収だ。ここまで、ただ働きであるルインの心は少しばかり揺れた。

そもそも、ここにギルドルームを作る必要性を感じていないという理由もある。しかし、
「市場価値を考えると、受け取れませんね。残念」

ルインは短剣を投げ上げた。それを見て、パンドラは顔色を変えると、一枚のカードを投げてよこした。

「ならば、これで立ち去るがよい！」

ルインの足元に、パンドラのモンスターカードが落ちる。モンスターカードは、使用して成功すれば、自分の能力を底上げできるカードである。レアな素材とは言えないが、売買も取引も出来ないため、魂の器より集めにくい物ではある。

瞬間、迷った。

そして、

「ごめん。みんな」

ルインは魂の器とカードを拾い上げた。ここにギルドルーム作ったら遠いし。ただ働きだと、回復用の薬だけで赤字だし。シルヴァ姫のお化け嫌いの克服は手伝ったし。

「ええええええ、先輩っ」

アーティの声が後方で聞こえた。

パンドラが扇を振り、絨毯がめくり上がる。そのまま、絨毯の上に乗っていた四人を、絨毯ごと扉の外へ押し出した。絨毯にまかれるようにして、四人は床に投げ出される。

扉は、四人と絨毯を放り出し、最後にシルヴァ姫の写真を排出して、勢い良く閉じた。ひらりと最後に排出されたシルヴァ姫の写真が床に落ちる。

「ああ、せっかくのギルドルームが」

トニオが嘆いた。報酬をくれると言うなら、もう一度入っても良いが、扉を開けてくれるとは思えない。

「先輩の裏切り者う」

アーティが絨毯に包まれたまま、声をもらした。財宝には目がない職業なんで。この衝動ばか

りは抑えられないんで。いや、ごめん。

「童はギルドルームについては問題ないぞ。だが、童を粗末に扱うでない」

これまた絨毯に包まれたまま、シルヴァ姫が言う。本日、二度目の「粗末に扱うな」という忠告である。

ルインは、もぞもぞと動くと絨毯から這い出して、背伸びをした。

「まあ、なんですか。帰りましょうか」

8. トニオへ捧げる請求書

エリアス都市。

シルヴァ姫は、王宮に無事送り届けられた。お化け嫌いが克服されたかは、分からない。

ギルドルームの確保が難しいということで、『株式会社トニオ』は早々に解散することとなった。通常のギルドルームはどうしても嫌だそうだ。その代わりに、

「次は、神社でも作ろうかと思うんですが、神主などやってみませんか？ 鳴かないカラスのお守りとか作って、縁起物として、リフレする方に売るんですよ」

そんな提案をトニオから受けたが、丁重に断った。

「成功率に反映しないお守り売って、冒険者から命を狙われるのはごめんです」

とか、なんとか言って断った気がする。

「これから、どうするんですか。先輩」

エリアス都市のレストラン。テーブルの向かい側から、アーティが聞いてきた。

「さあ」

ルインは、曖昧な言葉を返す。

「ギルドって思いの外、楽しかったですね」

アーティが呟いた。この呟きに、ルインは返答しなかったが、同意だった。

テーブルに紅茶が届いて、アーティがそれに蜂蜜を注ぐ。相変わらず、天空豆の樹塔で採れたという蜂蜜からは、良い香りがした。

「そういえば、モンスターカードは成功しました？」

言われて思い出したという感じで、ルインは、パンドラからもらったモンスターカードを取り出した。使用すれば悲しい音が鳴る。

「あ、失敗した」

モンスターカードは、ただの紙切れに早変わり。それを、ルインは何気なく眺めて、裏返した。そして小さく声を上げる。

「やってくれる」

ただの紙切れと思った物を裏返せば、『請求書』と書いてある。続けて『ゴシックルーム修繕費。内訳：陶器の壺、テーブル、剣、絨毯、カボチャお粥など』と記されており、多額の数字が書かれていた。

「トニオさんに届け物だな」

ルインはそう言って、請求書を眺めると、少し思案してから、数字のゼロと、支払先をペンで書き加えた。請求金額を水増しして、差額を拝借する魂胆である。

「どうしたんです？」

アーティが尋ねる。ルインは、楽しそうに笑顔で答えた。

「ギルドの設立費用を工面しようと思って」

「あ、先輩、ギルド作るんですか？ そしたら、私も加入しますよ」

アーティが楽しそうに言った。

何もかも、この請求書をトニオに渡したら、だけどね。

その台詞をルインは口の中で呟く。窓の外には、たくさんの冒険者と、たくさんの店の人。経験値やレベル上げも楽しいが、自分には、億万長者の夢を見るのが合っている。

そう思ってルインは、トニオへ捧げる請求書を眺めた。

完

トニオへ捧げる請求書

<http://p.booklog.jp/book/26409>

著者 : 72gusa

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/72gusa/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26409>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26409>

【 出 演 】

ルイン 職業 : ルーインウォーカー、短

アーティ 職業 : アーティスト、癒

トニオ 職業 : 交易商人

シルヴァ姫 職業 : 王女

ラジャータ国王 職業 : 国王

モンスター他 多数

【簡易履歴】

2011.6.5 >> 完成

2011.6.7 >> 紹介文の変更など